# 82　曽孫の子・孫を仙台では何というか

**問**　ひまごの子と孫とを、仙台では何と呼びますか。

**答**　仙台地方では、曽孫の子すなわち玄孫のことを「やしゃご」、曽孫の孫である来孫のことを「ぞんぞりご」といっています。

前者の「やしゃご」は、「言海」（大槻文彦）に『＜やしゃご＞玄孫、曽孫（ひひこ）の子、今訛してヤシャゴ』とあり、「広辞苑」第２版（新村出編）には『＜やしゃご〔玄孫〕＞　ヤシワゴの転』とあり、広く使われている言葉ですので、仙台地方だけの呼び方ではありません。「浜荻」（匡子）に『やしはご、和名抄玄孫、爾雅[(2)]云曽孫之子為玄孫、夜之波子〔やしはこ〕。新勅撰[(3)]、鶴の子の又やしはごの末までもふるきためしを我世とやみん、前関白』。「俗語考」（橘守部[(4)]）に『やしやご、やしわ子の訛れる也。和名抄に曽孫の子を玄孫となし、和名夜之波古とあり。言の心は弥末（イヤハシゴ）の謂か』とあり、古くから使われてきたことがわかります。これと同系の語が九州の福岡・鹿児島地方にあり、「やしまご」といっています。

後者の「ぞんぞりご」について、「仙台方言」（藤原勉、「仙台市史」第６巻の内、昭和２７）では廃語とされていますが、「自伝的仙台弁」（石川鈴子、昭和４１）には採り入れられてあり、使用頻度が極めて低いだけのことで〔実際例が稀であるため〕、現在もなお生きています。「浜ぞんぞりご」とも呼ばれたことがあるのは、非常に稀有な「ぞんぞりご」の誕生・生存の実例が、古来、早婚と長寿者とが特に多かった海岸沿いには、割にあったことを示すものであります。

注(1)　成立年代不詳。写本で伝わったものを昭和７年「仙台方言音韻考」（小倉進平）の中に採録、はじめて活字化された。

注(2)　十三経〔じゅうさんぎょう、また、じゅうさんけい〕の一。魯の周公の作といわれるが詳らかでない。字書の最古のもの。この書によれば８世の孫まで、己－子－孫－曽孫－玄孫－来孫－昆孫－仍孫〔じょうそん〕－雲孫の順である。これとは別に、曽高祖を去ること遠くただ耳で聴くという意味の耳孫〔じそん〕という語がある。来孫のことをいうとも、また仍孫のことをいうとも、諸説があって一定しない。「己」からこの辺まで遠く下がると曖昧になるからであろうか。わが国でも「つるのはし」「つるのひこ」「つるのまご」と呼ぶ対象が、玄孫であったり、雲孫であったりするのと軌を一にするものである。なお、十三経とは、中国の経書、即ち易経・書経・詩経・周礼・儀礼・礼記・春秋左氏伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・論語・孝経・爾雅・孟子（または爾雅・孟子の代りに老子・荘子）の称。南宋〔１１２７～１２７９〕の頃制定。

注(3)　新勅撰和歌集。二十一代集の一。全２０巻。貞永元年〔１２３２〕藤原定家撰進。武家の

歌が多いので、宇治川集とあだ名された。二十一代集とは、八代集と十三代集との総称。八代集とは、八代の勅撰和歌集即ち古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集の８集の称。十三代集はその後の勅撰和歌集、即ち新勅撰集・続後撰集・続古今集・続拾遺集・新後撰集・玉葉集・続千載集・続後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新続古今集の１３集の称である。

注(4)　たちばなもりべ。江戸後期の国学者・歌人。本姓は飯田。池庵・椎本〔しいがもと〕と号した。古典万葉の解釈において、本居宣長に対して一家をなした。「俗語考」は、俗語・方言の研究書で、「橘守部全集」の第９～１０巻に活字化されている。他に「稜威言別〔いつのことわき〕・「湖月抄別記」「助辞本義一覧」などの著がある。嘉永２年〔１８４９〕６９才で歿した。

資料　言海（大槻文彦）
広辞苑（新村　出編）
全国方言辞典（東条　操編）
自伝的仙台弁（石川鈴子）
仙台の方言（土井八枝）

## 83　いつ頃から「青葉山」と呼び始めたか

**問**　仙台の青葉山は、いつ頃から呼び始めたのでしょうか。「仙台地名考」でも、これについては『いつ頃から呼ばれたかは詳かでない』とだけしか書いていません。

**答**　現在、青葉山と呼ばれるのは、天守台を中心とした高地一帯の汎称として、一般に通用しています。また、その大半の地が字名荒巻青葉[1]となっています。その確実な起原はいつか、無論仙台開府以前に見出すことはできませんが、「仙台地名考」の通り詳かではありません。ここは、慶長５年〔１６００〕１２月２５日、伊達政宗による築城縄張り始めの時点を境に、実に歴史的変貌を遂げることになります。それと同時に、その真下に広がる無人の湿地原野が、４万を超える人口密集の城下町に一変するという驚異的開発によって、この山は、一挙に人間生活の息吹きの枠内に組み込まれて行くのです。そのことが、この山の呼び方に変動を及ぼしていないかどうか、この時期の前後の史料の検討が最も重視されるべきポイントであります。中世に遡ると、北朝側の奥州探題吉良貞家の古文書の残存したのがあります。その中で、観応２年〔北朝年号。１３５１〕２月の日付の